



鎌倉時代における禅理解の特質—無住道暁を中心に—

新見, 克彦

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2014-03-25

(Date of Publication)

2016-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6212号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006212>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

鎌倉時代における禅理解の特質—無住道暁を中心に—

氏名 : 新見 克彦

神戸大学大学院文化科学研究科社会文化専攻 (博士課程)

指導教員氏名 (主) 市澤 哲 教授
(副) 奥村 弘 教授
(副) 福長 進 教授

論文内容の要旨

本稿は、鎌倉時代に大陸より伝えられた禅が、何故日本社会に定着していったのかについて、当時の人々が禅をどのように理解していたのかという視覚から分析することで、明らかにしようとした研究である。

序章では、鎌倉時代における禅の日本定着という視点から、重要と思われる研究史を整理し、次の二点を確認した。まず一点目は、宋禅そのものが兼修的であるという実態を考慮してこなかった「純粋禅」概念を設定する研究史を修正し、大陸よりもたらされた宋禅が日本社会においてどのように理解されたのかについて、史料に即した形で改めてその実態を解明していく必要があること。また研究史上、兼修禅の見直しがなされたことにより、東福寺開山である円爾 (1202~1280) を派祖とする聖一派が、鎌倉時代における禅宗の主流派として注目すべきことが確認された。そして二点目は、原田正俊氏の研究が提示するような、黒田俊雄氏の顕密体制論を立脚点としつつ、顕密仏教と禅宗の差異を明確にする方向性が、禅宗が新規に日本社会に受容されていく説明としては説得力があることを確認した。

こうしたことを踏まえた上で、課題として設定したのは、鎌倉時代において、もともと禅僧ではなかった僧が、何故禅に帰依し、禅僧となっていたのかという点についてである。この点は、年譜的な事実確認において、研究史上において認識されているものの、その理由については、個々の禅僧の思想に即した形で十分に追求がなされていない。しかしこの点は、当時の僧が自らの思想的立場を変える程に、禅思想に魅力を感じたということであり、鎌倉時代における禅宗の日本定着を考える上で重要な問題である。そこで本稿では、そうしたことを分析する素材として、説話集『沙石集』の著者として著名な無住道暁 (1226~1312) をとりあげ、この問題について検討した。無住は、もともと禅僧ではなかったが、円爾の弟子として禅に帰依していった僧である。

第一章では、無住における禅理解とその独自の意義を分析した。手掛かりとしたのは、禅宗特有の文字を立てない価値観 (=「不立文字」) の無住の解釈である。無住は「不立文字」の解釈について、修行重視の媒介論理として読み込んでおり、それをもとに、既存の諸宗の言説を読み直すという作業をしている。従来の無住研究では、禅教一致・禅密一致の側面が強調され注目されてこなかったが、無住において、禅の論理は諸宗の中に組み込まれず、顕密仏教を相対化する新しい価値観として認識されていた。無住における禅の意義とは、顕密仏教の文字・言語の論理にとらわれずに菩提心や修行のあり方を追求できる点にあった。このことは、禅思想が当時の僧にとって、顕密仏教にはない新しい魅力を感じさせていたことを示している。さらに無住は、在家をも対象に含めた具体的な実践論に禅の論理を活用していた。諸行における浄不浄論においては、行住坐臥の仏法ということを読み、それが行住坐臥の行業につながることによって、浄不浄を論じることを退けている。ここで重要なのは、行住坐臥の仏法の境地が提示され、そうした心は文証よりも重要

な価値観であるという認識が示されていることである。行住坐臥の仏法という境地は、行住坐臥の禅につながるものであったが、これは当時の禅宗内において共有されていた論理であり、その中において、無住は行住坐臥の禅の解釈を、諸行に通底性のある論理として咀嚼したのである。行住坐臥の仏法という境地が文証を超えるという解釈は、こうした禅理解の中から生まれたものとして把握することができる。

第二章では、無住と同世代で、無住と同じく円爾の弟子であった痴兀大慧（1229～1312）との禅理解の共通性について、無住の見性観や痴兀における無心無念の理解を取り上げて検討した。両者は鎌倉時代後期における、得法のみを重視するような非融和的な動向に批判的であり、それぞれの立場からその課題克服に向けて主張を展開していた。無住は「見性成仏」について、見性した人でも再び悪趣に墮してしまうのかという現実的な問題にこだわり、絶対的な悟りの境地の獲得ではなく、不完全の自覚に基づいて、心のあり様を追求するという視点から見性という価値観を追求することで、「偏執」に陥らない価値観を提示している。痴兀の場合は「無心無念の発菩提心」を重要視し、正しく菩提心を起こすには、一切の法にこだわらない無心無念になる必要があることを主張し、さらに例え無心無念であっても悟りを開いてから日が浅いので、煩惱に迷われないわけではないと説いて、さらなる菩提の行を勧めることで煩惱を除くことを勧めている。二人の共通点は、頓悟（たちどころに悟れる）のみに重点を置く禅理解の見直しにあり、得法のみを重視により、他宗の教えの否定が導きだされるような動向が発生していた、鎌倉時代後期の社会動向を受けての対応といえる。彼らにとっての禅は、仏法を動揺させる非融和的な主張を否定する上での新しい論理であった。彼らは、非融和的な主張を否定する中で、「見性成仏」・「無心無念」といった禅独自の論理を新たに活用することで、諸宗融和を実現しようとしている。両者が当時の社会的課題の克服を目指して、禅の革新性に注目していた点は注目される。

第三章では、無住が脚氣の病によって坐禅のできない禅僧であったことに注目し、坐禅の困難な無住が、何故禅僧としての自意識を持ち続けていたのかについて検討した。その中で鍵としたのは、無住の宋禅受容のあり方である。鎌倉時代後期は、禅宗の広範な流布の中で、他行を軽んじて坐禅に執着する禅僧や、悟りに執着して坐禅をしない禅僧を生みだしていた。無住は坐禅の困難な自身の状況も含めて、そうした坐禅をめぐる社会的な動向に課題意識をもっていた。それに一定の解答を与えたのが、智覚禅師の著作をはじめとした宋の典籍との出会いである。無住は宋の典籍を活用して、坐禅と諸行との融和、修行重視と一体化した見性観、坐禅が困難な者への代替行（經典読誦等）の提示、といった主張を展開していった。こうした点は、宋の典籍が日本社会に即した形で読み直されていく過程でもあり、それはもともとの宋の仏教とは異なるものを生み出したといえる。ただし、無住のみならず、鎌倉時代の禅僧達が宋の典籍を典拠に物事を語るということは、その内容について、魅力を感じていたことの証左でもあり、宋の典籍から何を見出していったのかについては、さらなる追求の必要がある。また無住の場合は、その法華経信仰と結びつくことにより、『法華経』を活用した、鎌倉時代後期における日本社会に即した形での禅理

解の提示を試みており、こうした動向は日本社会における禅の定着を考える上で重要である。

第四章では、鎌倉時代後期の紀伊国野上荘における臨済宗法燈派の禅宗布教と在地領主の禅宗受容について論じた。前章までとはやや趣が異なるが、本稿全体の中での位置づけとしては、無住のような禅僧の主張が、どのような形で在地に受容されていくのかという点についてアプローチするという意図がある。野上八幡宮所蔵『御託宣記』とは、紀伊国建治四年（1278）、紀伊国野上庄の下司木工助入道信智の娘延命女と長男の嫁如意女が重病にかかり、八幡神が憑依し、由良興国寺の無本覚心らと問答を繰り返した一連の事件を記録したものであり、この事件については、無住も『沙石集』で言及している。なお、無本覚心（1207～1298）を派祖とする臨済宗法燈派は、聖一派と同様に広く地域展開をしていた鎌倉時代における禅宗の主流派である。

『御託宣記』においては、八幡神が禅宗と在地領主の紐帯となっており、禅宗が認知される上において、神祇の取り込みが重要であったことがあらためて確認できる。また、信智一門が作成した殺生禁断の起請文は、一度破られた起請文を八幡神の託宣という場においてやり直すことで、信智一族内の結束を改めて強めようという側面があったと考えられる。さらに、そうした状況下における新たな精神的な柱として禅宗が必要とされたのである。また、『御託宣記』において諸宗の中で最も勧められているのは禅宗（坐禅）である。在地の八幡神がその地域の人々に直接語りかけて坐禅を勧めることは、禅僧が直接語りかけるよりも、布教の上において大きな影響力を発揮したことは間違いない。神を媒介に人々の心に届きやすい説明をもって、禅僧が坐禅の布教を試みていたことを『御託宣記』から読み取ることができる。さらにその布教においては、人々になじみのある『法華経』が活用されており、その効果は一層高まったと考えられる。

附論では、鎌倉時代における破戒をめぐる思想的動向を明らかにする中で、無住の戒律観や菩薩戒の授戒活動について論じた。鎌倉時代においても顕密僧の破戒は常態化しており、さらに鎌倉時代後期においては、禅僧・律僧においても持戒遵守の属性を覆すという現状があった。自身も破戒僧であった無住にとって、こうした現状の中で如何に仏法を興隆するかという課題は切実な問題であった。そこで、破戒僧であっても、菩薩戒の授戒活動のような宗教活動を知音・檀那との合意のもとに真摯に行うことが、むしろ仏法に対する社会的欲求に応えることにつながることを、無住は主張した。それは、無住なりに僧侶としての社会的責任を果たそうとするための主張でもあった。

全体を通して気がつくことは、鎌倉時代における禅理解については、日本という地域的な事情に規定されて、解釈された部分が多いということである。顕密仏教という要素はそうした典型といえる。しかし、宋の典籍に典拠を求めるという行為からも分かるように、その原型といったものが非常に大事にされている面もあり、そこから何を採用したのかという点が重要である。ここまで、無住を中心に鎌倉時代における禅理解の特質について論じてきたが、鎌倉時代において禅僧でなかった僧が何故禅に帰依していったのかという問

いについては、顕密仏教をめぐる社会問題が発生する中で、顕密仏教の相対化が必要とされたこと、宋禅がそうした問題の解決策を提示する新しい論理を提示するものとして必要とされていったことを指摘することができる。そうして理解された禅は、地域展開をする際において、在地信仰や在地領主にとっての政治的意味といった要素を取り込みながら流布されていく。このような二重三重の経緯を経ながら、禅思想は日本に流布していったのであり、それは当時の人々の課題意識に対応した思想展開でもあったのである。

論文審査の結果の要旨

氏名	新見 克彦
論文題目	鎌倉時代における禪理解の特質—無住道暁を中心に—
要旨	<p>本論は、鎌倉時代に禅宗が、日本社会に定着していった理由を、主として顕密僧が禅をどのように理解していたのかという視点から分析することで、明らかにしようとした研究である。</p> <p>序章では、鎌倉時代における禅の日本定着に関する研究史を整理し、次の二点を本論の出発点として確認している。その第一は、移入された宋禅そのものが兼修的であるという実態を考慮してこなかった「純粋禅」概念を設定する研究史が修正されたことである。そしてそれに伴って、東福寺開山である円爾弁円(1202～1280)を派祖とする聖一派を、鎌倉時代における禅宗の主流派として注目する研究傾向が強まってきたことを指摘する。第二に、原田正俊氏に代表される、黒田俊雄氏の顕密体制論を立脚点としつつ、顕密仏教と禅宗の異同を明確にする研究の方向性が、禅宗が新規に日本社会に受容されていく説明として説得力があることを指摘する。</p> <p>以上の整理を踏まえ、本論では、鎌倉時代において、本来禅僧ではなかった顕密僧が、何故禅に帰依することになったのか、言い換えるならば、何が禅思想の魅力であったのかを、当時の仏教のあり方から考えること、が課題にすえられる。そして、この課題に迫るため、本論では顕密僧として出発しながら、円爾の弟子となって禅宗に傾倒していった無住道暁(1226～1312)を注目し、その著作である『沙石集』を上記の観点から分析する方法をとることが提示される。</p> <p>本論の第一章では、無住の禅理解とその独自の意義が分析される。その手掛かりされるのが「不立文字」といわれる、禅宗特有の文字を立てない価値観に対する無住の解釈である。無住は「不立文字」を、顕密仏教の文字・言語の論理にとらわれず、菩提心や修行のあり方を追求することと解釈し、それをもとに、既存の諸宗の言説を読み直し、自分の宗派の優越性を強調する「驕慢」「偏頗」を克服しようとしたとする。そしてここに、禅思想を持つ、当時の顕密仏教にはない新しい魅力があると指摘する。</p> <p>さらに無住が、在家も対象に含めた具体的な宗教実践に禅の論理を活用していたことに注目し、顕密諸宗が重視する文証よりも行住坐臥の仏法の重要性を説き、これを所行に通底したものとして説き、宗教実践における浄不浄を論じることを退けるとともに、顕密諸宗の融和とその先にある文証にとわれない修行を展望しており、このようなあらたな思考と実践をなしえる点において、禅宗が重視されたと結論づける。</p> <p>第二章では、無住と同世代で、同じく円爾の弟子であった痴兀大慧(1229～1312)の禅理解をとりあげ、両者の共通性について、「無心無念」の理解を取り上げて検討している。二人の共通点は、鎌倉後期の仏教界に、頓悟(たちどころに悟れる)や得法のみ重点を置くことで、他宗の教えを否定しようとする動向に対して、その非融和的な主張を否定しようとした点にあり、そこで見いだされたのが、「見性成仏」・「無心無念」といった禅独自の論理で、彼らはそれを通じて諸宗融和を実現しようとしていたと指摘する。</p>
主査記載氏名・印	市澤 哲

第三章では、無住が脚気の病によって坐禅のできない禅僧であったことに注目し、坐禅の困難な無住が、何故禅僧としての自意識を持ち続けたのかについて検討している。その中で注目されているのは、無住の宋禅受容のあり方である。坐禅が困難な自身の状況も含め、坐禅をめぐる社会的な動向に課題意識をもっていた無住は、智覚禅師の著作をはじめとした宋の典籍を活用して、坐禅と諸行との融和、修行重視と一体化した見性観、坐禅が困難な者への代替行(經典読誦等)の提示、といった主張を展開していったとする。そしてこうした営みを、宋の典籍が日本社会に即した形で読み直されていく過程でもあることを指摘する。さらに無住が、代替行として法華経信仰に強い関心を示し、『法華経』を活用したことに注目し、『法華経』の捉えなおしが、禅宗の日本社会への定着を進めた点に注意を喚起している。

第四章では、無住にみられるような禅僧の主張が、在地にどのようにして受容され、浸透していかを論じる。具体的には、鎌倉時代後期の紀伊国野上荘における臨済宗法燈流の禅宗布教と在地領主の禅宗受容について、野上八幡宮所蔵『御託宣記』を素材に論じている。『御託宣記』とは、建治四年(1278)、重病に陥った紀伊国野上荘の下の娘と長男の嫁に八幡神が憑依し、由良興国寺(西方寺)の無本覚心(1207～1298)らと問答を繰り広げた一連の事件を記録したもので、この事件については、無住も『沙石集』で言及している。『御託宣記』においては、八幡神が禅宗と在地領主を結びつける役割を果たしており、ここから、禅宗が在地に根を下ろす過程で、神祇の取り込みが重要であったことを確認する。また、下司一門が作成した殺生禁断の起請文作成は、一度破られた起請文を八幡神の託宣という場においてやり直すという過程を経ており、下司一族内の結束を再強化する意図が読み取れるとする。さらに、『御託宣記』においては、八幡神が地域の人々に直接語りかけて坐禅を勧め、さらに『法華経』を活用しており、第三章で確認した無住の『法華経』に対する関心と強い関連性が見られることを指摘し、禅宗が在地の信仰や従来の宗教的風土に対応し、それらを摂取しながら定着していった過程を明らかにしている。

さらに、附論では、鎌倉時代における破戒をめぐる思想的動向を明らかにする中で、無住の戒律観や菩薩戒の授戒活動について論じている。

以上の議論を通じて、鎌倉時代において禅僧ではなかった僧が何故禅に帰依していったのかという問いに対して、顕密仏教をめぐって「偏頗」や「驕慢」といった問題が発生する中で、本来的に兼修を指向する宋禅が、かかる問題の解決をはかるための新しい論理として仏教界に呼び込まれていったという回答を提示する。そしてさらに、こうして移入された禅は、地域展開をする際において、在地信仰・神祇や在来の仏教—と在地領主—との政治的意味といった要素を取り込みながら理解されていったとする。以上である。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	市澤 哲
副査	教授	原田 正俊
副査	教授	奥村 弘
副査	准教授	樋口 大祐
副査	准教授	古市 晃